
一筋の光。

界 宰 天

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

一筋の光。

【Nコード】

N8067D

【作者名】

界牢 天

【あらすじ】

俺は、クラスの奴らに避けられていた。まあ、いじめ……とはちよつと違うか？まあ、そんな感じ。そんな俺の、ある日の出来事。

一筋の光。

(前書き)

あー……はい。

界牢です。

一応、頑張ってみたんですが……

一人称 + 恋愛

を目指したんですが……

ゴメンナサイ。

一応、学園にしておきます。

一筋の光。

この世界は、下らない。

いや、人間が作る世界は、下らない。

自分と異なる者を拒み、「気持ち悪い」等と言って蔑む、クソ野郎どもが実に多いからだ。

少なくとも、俺はそう思っている。

そう思うのは、実際に俺がそうされているからである。

ふと、周囲を見回す。

ここは、とある中学校の一クラス……まあ、自分が通っているのだが、学校の名前が本当に徒阿瑠とろ中学校だから、初めて見た時には鼻で笑ってしまった。

少し古びて、何度直しても気が付いたらいつも3分ほど遅れている時計。

その少し下に目をやると、朝のホームルームも始まっていないのにあまりきれいではない黒板。

さらにその少し下に視線を落とすと、クラスのクソ野郎達が談笑していた。

俺から、明らかに距離をとって。

俺は、生まれつき力が強かった。

それだけならまだ「力持ち」「頼りになる」くらいで、むしろ嬉しかった。

しかし、小学校5年生になった数日後、ちょっとした事件が起こった。

友人が、高校生くらいの不良数人に絡まれていて、俺に向かって視線を投げかけてきた。

涙腺が緩みきった顔で。

恐怖はあったが、勇気を振り絞り、高校生と友人の間に入る形で割り込んだ。

……駄目だ。

……思い出して、何になるんだ？

他に頼っても、俺を助けることは無い。

だから、俺は俺のためにだけ生きることにした。

他人なんて、頼らないと誓った。

「全員席に着けー。出席とるぞー」

がらがらがら、と戸が開き、担任教師の顔がのぞく。

クラスメイト達はふらふらと自分の机に向かうが、俺はさっきから座っているから問題ない。

担任が、面倒臭そうに生徒の名前を呼び始めた。

俺のそばの席には、誰もいない。

数ヶ月前に、数人が転校したのだが、それはばらばらの席の奴だった。

しかし、次の席替えの時、全員が右の隅の席とその周りを空けた。俺がそこに座ればいいのだと思った。

どうせ、どんなに友好的に接しても、距離が縮むことは無い。

なら、自分から離れて行こうと思った。だから、そこに座った。

担任も、それを黙認した。

「おい、霧砂エイジ、返事」

「……はい」

自分の番が来たので、とりあえず返事をして、しばらくぼつと
する事にした。

もう、慣れた事だ。

いまさら動いても、無駄だ。

そんなことを懇々と思い続けても、俺の気分は憂鬱にならず、ま
ったく変化しない。

それを改めて実感して、俺は自分を嘲笑いたくなった。

「うし、じゃあ転校生、入ってきていいよ」

担任がいきなり言っつて、クラスが多少ざわつく。さっきから開け
っ放しの戸から、転校生と思われる人物が入ってきた。

「はじめまして！ 藍原あいはらみつき美月です！ よろしくお願いします！」
彼女の髪の色は、手を加えた様子も無い黒で、少し長めだった。
瞳の色も黒で、懐っこそうで、一般的に人気がありそうな顔立ちだった。

「藍原さんはお父さんの都合でこの学校にきました。じゃ、えーと……」

担任が、チラッと俺の方を見るが、すぐに別の方を見て、席を探し始めた。

「あ、あそこがいいです！」

藍原が、ある一点を指差す。

それを辿ろうとしたが、どう考えても俺の方を指している。

「……え？ 本当に………そこでいいのか？」

「駄目ですか？」

担任が聞いたが、藍原は無垢な表情で担任を見た。

流石に、担任として明らかに拒絶するのはよくないようで、「うん、まあ、いい、けど………」と言って、許可した。

と言うか、この転校生は馬鹿だ。

この状況で、俺が避けられている事は、大体誰でもわかるはずだ。

「よろしく、えーっと………えいじ君！」

なんか挨拶された。

「あん？ ああ、よろしく」

適当に返事をおこす。

そうすれば、相手にされていないと思い、自然に避けるだろう。

「ねね、休みの日って何やってるの？」
いきなりか。

全くもって、馬鹿だ。

「ホームルーム中だぞ。黙ってる」

とにかく、冷たくあしらう事にした。

「うん。じゃあ、終わった後に聞くね」

………純粹すぎる。

まさかここまで馬鹿とは思わなかった。

「……勝手にしてる」

窓の外を見ようとしたが、窓の手前には藍原がいる。仕方が無く、何処を見るわけでもなくぼつとする。

担任が、今日の日程を言っている。まあ、断片的に聞き取る限り、事前に連絡されていたものと変わらないようだ。

チャイムが鳴った。

俺は椅子を引き、席を立つ。

「あ、どこ行くの？」

藍原がすかさず立ち上がる。

「……トイレ」

まあ、その目的はこの馬鹿から離れるためなのだが。

戻ってくるころには質問攻めにあっているだろう少女を見ずに、俺はここから去る。

予想通り、藍原はクソ野郎どもに囲まれていた。

実に、楽しそうに見えた。

廊下でふらふらしてようかとも思ったが、寒い。

教室に入ると、すぐにクソ野郎から距離をとる。

話しかけてくる奴なんて、誰もいない。

それが、一番好ましいことだ。

それなのに、

「おい、えいじ君！」

囲みから抜け出てきたこの馬鹿は、いったい何なんだろう。

ひよつとして、あれか。

偽善者か。

俺が差別されていることを知って、自分はいい子だからそんなこと
しませんよー、とかいう馬鹿か。

アホ臭い。

一筋の光。

以前も、偽善かどうかは知らないが、俺に近寄ってきた奴がいた。そいつが高校生に絡まれて、助けを求めてきた時に、助けてやった。

俺は、高校生を半殺しにしてしまった。辺りに鮮血と肉片が飛び散り、倒れて行く高校生の後ろにいたのは。

恐怖に塗られた表情の、友人の顔だった。

友人は、叫びながら俺から逃げていった。

それから、そいつも俺を避けた。

ちなみに、俺のこの怪力は、今までに例を見ない病気らしい。興味を持った医者が調査したりもしたが、力を恐れて逃げた。

だから、こういう馬鹿は、早めに遠ざけた方がいい。

「一言、言っておくけどな」

「なに？」

少女は、何の恐怖も持たずに聞いてくる。

「俺から離れる。じゃなきゃテメエもただじゃすまねえぞ」

簡単なことだった。

いじめられてる奴に味方すれば、そいつもいじめられる。

幸い、俺には「力」があるから物理的ないじめは無いが、この馬鹿はたぶんボコられる。

だから、こうやって脅しておけば大丈夫だと思ったが、

「んー……でもさ、悪い人には思えないんだよねー」

こんなことを言ってきた。

「馬鹿か。高校生三人半殺しにしたんだぞ」

「それでもさ」

脅しも通じない。

それどころか、予想外の事を言ってきた。

「君は、優しい人だよ」

……はあ？

高校生三人ボコって？

友人のため、なんて一言も言ってるねえぞ？

アホくせえ。

「だって、私のこと心配してくれたもん」

……何を言っているのだろう、この馬鹿は。

俺は、テメエなんぞ心配した覚えは無い。

「さつき、言ったよね。『俺から離れる。じゃなきゃテメエもただじゃすまねえぞ』って」

ああ、言っただね。

「だから何なんだよ」

「と言うことは、『俺に近寄ったらお前もいじめられるぞー』って意味だよな」

うれしいね、馬鹿でも分かるように説明できた。

「それで？」

でもまあ、次に何言うかは分からんが。

「となると、それは『君としては避けたい事』なわけだ」
「…………ツ」

びくん、と俺の肩が震える。

そんなこと、言われたことも無かった。

そして、自分でも思ったことは無かった。

なら、何故俺は動揺しているんだ？

「……とまあ、こういう訳だと思うのだよ。当たり前？」
「こいつの言う通りだと？」

俺が無意識のうちに、そんなことを考えていたと？

もう他に頼らないと誓っても、

無意識のうちに、救いを求めていたと？

頭の中が疑問でいっぱいになる。

まともな答えを探せない。

「大丈夫、怖くないよ」

聞こえた声は、一度俺の脳内を白紙にした。

何故とか、どうしてとか、疑問も消された。

そこに、注ぎ込まれた感情。

それは。

「この世界は、君が思っているほど汚くない」

暖かくて、柔らかくて、優しくて。

受け方によつては、今までの自分の考えを全て否定する言葉。

それでも、

今まで、俺が望んでいた物かもしれない。

チャイムが鳴る。

授業開始のチャイムだ。

辺りのクラスメイト達が、せかせかと席に着く。

それに合わせて、俺も席に着く。

隣に、藍原が座る。

藍原を、少し眺める。

藍原がそれに気づいて、とても優しくて明るい笑みを広げた。

少年は、歩いていた。

「よう」

少年の隣に、もう一人、少年が現れた。

少年は、その少年に軽く手を振った。

「おっはよーございますっ」と

もう一人、少年が現れた。

その少年にも、軽く手を振る。

一筋の光。

「やっほー！」

少しはなれたところから、少女の声が聞こえた。

少年の後方だった。

少年は振り向く。

その少女は、笑顔だった。

それを見て、少年も笑う。

「学校、一緒に行こ。えいじ！」

藍原が駆け寄ってくる。

「おう、美月！」

霧砂は、笑ってそう答えた。

あれから、数年後の話だ。

今、

俺は、前を見て生きている。

とても素晴らしい、世界の中で。

一筋の光。

(後書き)

はい、界牢です。

えー……

ど、どうでしょうか？

なんかもうゴメンナサイ！

一筋の光。

一筋の光。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8067d/>

一筋の光。

2009年3月24日11時46分発行